

アメリカ科へ進学した「おばさま」

第13期 近藤 夏子（旧姓 湊）（1965年卒業）

あれは秋の始まりの頃だったろうか。駒場の正門を入った左側に、ややくたびれた木造校舎があった。二階の大教室は、二百名以上の入室は危険につきお断りだったように記憶するが、その日はすでに定員を超えて、教養学科の各分科説明会に二年生が押し寄せていた。

やがて各分科の教授方が次々に登壇されて、其々の分科について話された。紳士的な話ぶりに教室は静まり返っていた。

そこへ今までとは趣を異にするエネルギッシュな話し方の、中屋健一先生がスピーチを始められた。優しげではない。学生を睨むように見渡され、「学生雑巾説」を述べられた。

「学生と雑巾は、絞れば絞るほど良い」一瞬何を言われたのか飲み込めないうたが、もう引き込まれていたのである。

「質問があれば○曜日の○時に研究室へ来い。ただしゲタばきは禁じる」一も二もなく面会に行こうと決めた。アメリカ科で絞られてみようと。時間通りに足音を立てないように気をつけながら、先生の研究室へと向かった。

ノックすると応答があって、丁寧に招き入れられた。「女子ですが、ついていきますでしょうか」と心にもない事を伺った。先生はにこやかに「大丈夫ですよ」と先輩諸姉の話をしてくださった。そして丁寧に送り出された。さすがアメリカ科であるなあと、階段を下って帰った。

其から2～3日して、どなたかと構内を歩いておられる先生を見つけた。駆け寄って挨拶をすると、怪訝そうに二度振り返られた。「うん？」やがてこの謎は解かれた。先生は娘の進学先を心配した母親が面会に訪れたものと思っておられたのであった。

授業が始まってすぐに、私に綽名が付けられた。「おばさま」と。